

---

# **アイドル探偵 7 「寿々菜と七不思議」編**

田中タロウ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

アイドル探偵 7 「寿々菜と七不思議」 編

### 【ZPDF】

Z7260Q

### 【作者名】

田中タロウ

### 【あらすじ】

駆け出しアイドル・寿々菜の中学生時代の不思議な体験。

学校で噂の七不思議を確かめに後輩の男の子と一緒に夜の学校に忍び込んだ寿々菜。ところが七不思議には秘密があつて・・・

## 第1話 キスシーン

「カツトー！」

その声と同時に、2人の顔がパツと離れた。

見物客から感嘆とも落胆とも取れるため息が漏れる。  
我らが駆け出しアイドル・スウこと白木寿々菜しらき すずなも、  
その中の1人であることをじに承知頂きたい。

といふことは、もちろん、その視線の先には・・・

「KANUさん、お疲れ様でした！」

「いえ。じつらこそ、ありがとうございました」

ホッとしたような笑顔のKANUが、  
相手役の寿々菜ではない駆け出しあイドルと握手を交わした。  
同じ駆け出しあイドルでも、KANUの相手役を務めているといふ  
点が寿々菜とは大違ひだ。

ここはKANU主演の連続ドラマの屋外撮影場。

最終話の収録とあって、駆けつけたファンで辺りは騒然としていた  
が、  
まさかキスシーンがあるとは誰も思っていなかつたので、  
「騒然」ビリの騒ぎではなくなつてしまつた。

しかし当のKANUはそんな騒ぎにも全く動じることなく笑顔を絶  
やさない。

これは、KANU十八番の「爽やか一枚目俳優モード」である」と  
に違はないのだが、

今はそれを増長させているある事由がある。

なんとKANUは明日から2週間のオフなのであるー・

こんな長期オフはデビュー以来始めてだ。

2週間に1回仕事があるかないかのスウとは訳が違う。

遊びまくってやるーーー！

中学生の時から芸能界について、多少大人びていると言つてもKANU  
もまだ21歳。

オフで張り切つてしまつのも無理からぬところだ。

しかし、浮かれ気分のKANUとは対照的に寿々菜の心は晴れない。

KANUに対しては一介のファン以上の想いを寄せている寿々菜。  
今まで散々テレビでKANUのキッシューンは見てきたが、生で見  
るのは初めてである。

加えてそのお相手は寿々菜と歳も芸歴も変わらない駆け出しアイド  
ル。

私、KANUを追いかけて芸能界に入ったのに・・・

さすがにいつもは能天氣な寿々菜も、自分の不甲斐なさにじょんぼ  
りとした。

「ラーメン3つ、チャーハンと餃子2人前ずつ!」  
「はいよ」

KAZUの呪縛（？）から解放された岩城和彦いわきかずひこが、馴染みの中華料理屋・来来軒で威勢よく注文をする。  
断つておくが、「ラーメン3つ、チャーハンと餃子2人前ずつ!」  
を1人で食べる訳ではない。

和彦に片思い中の2人

- - - 寿々菜と、和彦のマネージャーの山崎（30歳） - - -  
の分も一緒に注文しているのである。

いつもなら火花を撒き散らしている寿々菜と山崎だが、  
今日の寿々菜は大人しい。  
一方の山崎も、何故か難しい顔をしていて、寿々菜と一戦交えるつもりはないらしい。

ちなみに、女子高生と30歳の男が「一戦を交える」というと、あらぬ方向に想像が行きそつだが、もちろんそういう意味ではない。

「どーした、2人とも。こんないい日にしけた面しやがって」

もはやKAZUの面影もない和彦が、ラーメンをすすりながら2人の顔を見比べる。

「そうだ、寿々菜。さつきのキスシーン、どうだった?」

「・・・」

和彦は「デリカシーがない訳ではない。

わざと意地悪いことを言つて、寿々菜をおちょくつているのだ。  
しかしそれが分からぬ寿々菜はバカ正直に落ち込む。

「はい・・・よかつた、と、思います・・・」

「だろ? 寿々菜も早く俺とドラマでキスシーン演じれるくらいにな  
れよ。」

それまでファーストキスは大事に取つとけ

「わ、私、高校生ですよー! キスくらいしたことありますー!」

和彦が、そして寿々菜の言葉で我に返つた山崎が、ポカンとする。

「・・・寿々菜」

「はい」

「犬や猫とキスするのは、キスつて言わないんだぞ?」

「それくらい分かってます!」

しかし和彦は寿々菜の言葉を本気には取らず、ニヤニヤしながらラーメンへと意識を戻した。

和彦さんたら!  
私だつて・・・!

寿々菜が思わず考え込んでいると、

再び渋い顔に戻った山崎が鞄の中から紙を一枚取り出した。

「スウ。今度の講演会の件だけど、」

「講演会！？」

和彦が咳き込む。

「寿々菜！お前、講演会なんか聞くのか！？」

「違います！講演会って言つても、私が通つてた中学校の文化祭の中での話です。

この前、私ドラマに出たから、その時の話をして欲しいって・・・

「ああ。『御園探偵』か」

「御園探偵」とは、和彦が探偵役で主演している2時間物のサスペンスシリーズで、

年に1、2度不定期に放送される。

その第6弾に寿々菜が脇役で出演したのだ。

「あれ、なかなか好評だつたじやん」

「そりなんんですけど・・・そのせいでの講演会をする」とになつちやつたんです」

「ノーギヤラでね」

山崎が補足する。

「まあ、スウはボランティアでもなんでも、まずは顔を売らないと」

「おい、山崎。お前、俺のマネージャーだろ。なんで寿々菜の面倒みてんだよ？」

とたんに山崎の態度が変わる。

「そりなんですよ、和彦さん！僕もスウの面倒なんてみたくないんですけどね。

和彦さんがオフの間は、スウを見つけて門野社長に言われているんですね」

和彦と寿々菜が所属する弱小プロダクションのケチ社長・門野は、トップアイドルの和彦にはともかく、駆け出しアイドルの寿々菜にマネージャーを丸々一人はつけてくれない。

手の空いているマネージャーがその時々で寿々菜の仕事の世話をしている。

KAZUHIがオフなら、マネージャーの山崎もオフ、という訳にはいかないのだ。

再び山崎の態度が変わる。

「スウ。君が書いた講演内容の案だが、こんなんじや全然ダメだ」「・・・え？」

山崎から紙を受け取り、寿々菜は書いた。

以前、寿々菜が山崎に提出した、講演内容の案を書いた紙である。山崎のことはいけ好かないが、マネージャーとして腕は確かだ。それは寿々菜も認めざるを得ない。その山崎からダメ出しされたとなると・・・

一生懸命考えたんだけどな。  
何がダメなんだろう。

役決めのオーディションの様子、  
撮影現場の様子、  
笑えるNG話、等々。

紙に添削した様子はなく、  
一体何が「全然ダメ」なのか分からぬ。

「聞き手は誰なのか、どうこうことを聞きたいのか、スウは何を云  
えたいのか。  
その辺のことを見て、もつ一度書きなさい」  
「はい・・・」

学校の先生と生徒みたいである。

「あはは。寿々菜も大変だな。ま、頑張れよ」

しかし和彦の励ましも効果はなく、  
寿々菜はますます落ち込んだのだった。

## 第2話 秘密の小部屋

「白木先輩！いらっしゃい！」

校舎の3階にある演劇部の部室の扉を開くと、元気な声が寿々菜を迎えた。

寿々菜もほんの数ヶ月前までここにいたのだが、何故か遙か昔の事のように感じる。

中学時代、それに高校時代というのは、輝いている分、通り過ぎるのも早く、すぐに「思い出」になるものなのだ。

慣れ親しんだ部室の匂いも懐かしい。

「みんな、久しぶり！」

「白木せんぱーい！」この前のドラマ見ましたよ！あんな人気のドラマに出るなんて、

凄いじやないですか！」

「えへへ、ありがと」

ワラワラと寿々菜に寄つてくる3年生と2年生。

ちょっと遠巻きにそれを見ている制服がピカピカの生徒達は、寿々菜の卒業後に入ってきた1年生だろ。

「部員、増えたね。今、何人？」

「えっと、50人くらいです」

「50人！？凄い！私が入学した頃は20人くらいだったのに！」

「白木先輩のお陰ですよー。うちの演劇部から芸能人が出たってい

うんで、

希望者が殺到したんです。男子も増えたんですよ」

世間的には寿々菜はまだ人気のない駆け出しアイドルだが、  
ここに生徒達にとっては、先輩且つ芸能人である。

羨望の眼差しがくすぐったい。

「講演会、よろしくお願ひします！」

「うん。自信ないけど、なんとか頑張つてみる」

謙遜ではない。

山崎からの宿題を、講演会になつてもまだ完成させられないで  
いるのだ。

山崎は今、講演会の会場となる図書室で、

文化祭の担当者や教師と打ち合わせをしているはずである。

寿々菜は自分に向けられている顔を一つ一つゆっくりと見た。

・・・いない。

もしかして、辞めちゃったのかな。

ホッとしたような、ガッカリしたような、複雑な気分になる。

「ねえ。森田君は？今3年だよね？辞めたの？」

寿々菜的には名演技とも言えるさりげなれで、3年生の女子に聞く。

「森田君、一昨日の休み時間に階段から落ちて足を骨折しちゃったんです。」

だから今日はお休みです」

また！？」

寿々菜は苦笑した。

「じゃあ、辞めた訳じゃないんだ？」

「はい。でも3年生は今日の公演で引退なのに、休みだなんて残念です」

「あ、そっか。演劇部は文化祭の公演で最後だったね。森田君の役は大丈夫なの？」

「森田君は3年生になつてからずっと脚本担当だったから、大丈夫です。」

人気者だし演技上手だから、本当は舞台に立つて欲しかったんですけどねー」

怪我はさておき、どうやら「森田君」は元気にやつてゐるううなので、寿々菜は取り合えず安心した。

同時に、彼に今日の講演を聽かれなくて済むといふことが、何よりラッキーだ。

だつてあの子、絶対に笑つもん。

部員達は寿々菜にお茶を出すと、

「劇の準備があるから」と言って全員部室を出て行った。

寿々菜は一人、部室の中を歩いてみる。

部室と言つても普通の教室と変わらない。

ただ、劇で使う手作りの大道具や小道具が所狭しと並べられていて、まるで本物の劇団のようだ。

床にはみ出したペンキ、

片方のスピーカーが壊れたラジカセ、

配役が書かれた黒板・・・

全てが昔のままだ。

もしかして、アレも昔のままかな？

寿々菜は廊下に誰もいないことを確かめて、

部室の黒板の下に置いてある教壇に手をかけた。

が、押しても引いても動かない。

いつもは2人で動かしていたから簡単に動いたのだが・・・

もう一度教室の中に入れないことを確認し、

今度は足で思いつきり押してみる。

すると少しずつではあるが、教壇がズリズリと動いた。

その下の床から、80センチ四方くらいの正方形の扉が現れた時に

は、

寿々菜は汗だくなつてしまつていた。  
しかしそんなことも気にならない。

実はこの扉、家のキッチンによくある床下収納の扉のように見える  
が、  
寿々菜の秘密の扉なのである。

寿々菜は初めてこの扉を見つけた時のよにワクワクしながら扉の  
フックを引いた。  
扉がゆっくりと持ち上がる。

床から完全に扉を外すと、  
寿々菜はその中を覗き込んだ。

そこには4畳ほどの空間が広がっていた。  
高さは1メートルほどで、寿々菜が開いている扉は、ちょうどその  
部屋の天井部分にあたる。

小窓もあつて、明るいという程ではないが、  
おしゃべりをしながらお弁当を食べるには充分だ。

寿々菜はエイツとその中に飛び込んだ。

中から扉を引き摺つて閉めると、部屋は少し暗くなつたが、  
次第に目が慣れてきて小窓からの光だけでも部屋の全容が見えてくる。

古ぼけた板張りの床と、運動場に面している小窓。  
そして、天井の扉へ登る為の段ボールと、  
場違いなほどポップな柄のプラスチックのローテーブル。

寿々菜は頭が天井にぶつからないように中腰のままテーブルに近づいた。

テーブルには派手な色ペンで、

「卒業してもずっと友達だよ！」

「この部屋を見つけた人へ。ここは私達の大切な場所です。大事に使ってくださいね」と、書かれてある。

まだ、残つてた！

寿々菜は嬉しくなつて、テーブルの中に足を突っ込んで座つた。  
昔のように。

### 第3話 苦手なアイツ

もしも、HRがいつもより早く終わらなければ。  
もしも、廊下で誰かと話してさえいれば。

しかし、人生に「もしも」は存在しない。  
時間は巻き戻らないのだ。

・・・少々大袈裟か。

だが、寿々菜にとっては大袈裟でもなんでもなく、  
本当に大問題なのだ。

部室の扉を開けた瞬間、寿々菜は「どうしてもうとゆつくりといこ  
に来なかつたんだろ?」と激しく後悔した。そして、神様を恨んだ。

どうしてようによつて、この子しかいないのー?

しかし「この子」は、寿々菜が部室へ入つてきたことに気付いてい  
るはずなのに、

寿々菜に声をかけないどころか、見もしない。

椅子に座り、足を机の上に放り出して漫画を読んでいる。

もちろん学校に漫画なんて持つてくることは校則で禁止されている。

私は最上級生なんだから、ちゃんと注意しなきや！

寿々菜は毅然とした態度で「『Jの子』」に声をかけた。

「森田君。漫画なんか持つて来ちゃダメよ」

「言えた！私にだつて言えるんだから！」

しかし「『Jの子』」にと、森田少年は相変わらず漫画から視線を外さないまま言い返した。

「漫画はダメだけど、アイドル雑誌はいいんすか？」

寿々菜はグッと詰まり、鞄を胸に抱き締めた。  
中にはKAZUJIが表紙を飾っている、まさにアイドル雑誌が入っているのだ。

森田はチラッとだけ視線を寿々菜に投げた。

「それとも、芸能人の白木センパイは特別扱いなんすか？」

寿々菜が真っ赤になると、森田は再び視線を漫画に戻した。

寿々菜は、1学年後輩である森田の『J』をどうしても好きになれない。

「どうか、森田の方が寿々菜を軽蔑していく、

鈍い寿々菜もさすがにそれに気付いているので、森田に近づく『J』と

ができないのだ。

。 そうでなくても寿々菜は森田に良い印象は持つていのだが……

ならば近づかなければいいじゃないか、とこうと、そういう訳にもいかない。

寿々菜と森田は学校の先輩・後輩というだけではなく、

同じ演劇部に所属していて、部活でも先輩・後輩の仲なのだ。

だが本来、森田は演劇部に入部するようなキャラクターの少年ではない。

いかにも身軽そうな身体つきで、どう見ても運動部向きだ。  
実際、演劇には何の興味もない。

そんな森田がどうして演劇部に入部したのかといふと、  
森田は入学してすぐに、自転車で単独事故を起こし（猛スピードで  
木に激突したらしい……）、  
2週間の入院生活を余儀なくされた。

その間に、人気のある運動部は全て定員オーバーとなり、  
森田が退院した時には、入れる部活は限られていた。  
さすがに森田も「手芸部よりは演劇部の方がマシ」と言って演劇部  
に入部してきたのだが、

先輩である寿々菜達が無理矢理出演させた文化祭の舞台で森田は一  
躍「時の人」となった。

元々見栄えする容姿に加え、本人も驚きの演技力を持ち合わせていたのだ。

こうして森田は男子生徒の少ない演劇部で重宝されとはいるもの、  
本人は全くやる気がなく、顧問と先輩達に言われて泣々やっている、

といつのが現状だ。

そう。森田は一応、教師や先輩達の言つ事は聞くのだ。  
ただ一人の「センパイ」を除いては・・・

「酷過ぎる」

翌日の昼休み、寿々菜は秘密の小部屋の中でポテトチップスの空の袋を握り潰した。

寿々菜の向かいに座っている、眼鏡をかけた同級生・長谷部夏帆はせべかほが苦笑にする。

「森田君のこと? ほつときなさいよ」

「ほつときたいけど…ほつとけないほどムカつく!」

世間ズレしているせいいか人に憎まれることも憎むこともない寿々菜が、特定個人に対してここまで怒りを露あらわにするのはかなり珍しい。そういう腹に据えかねているようだ。

「でも、森田君てそんなに感じの悪い子じゃないけどなあ

夏帆がプラスチックのローテーブルの上に落ちたポテトチップスの欠片を口に入れた。

「私にだけ、感じ悪いのよ。森田君、私のこと軽蔑してゐるかい」

「軽蔑？」

「うん」

森田は、寿々菜がKAZUの追っかけの延長で芸能人になったことを不快に思つてゐるようなのだ。

そして、事あるごとに寿々菜を軽蔑する。

「昨日だつて、私が全然売れてないのを皮肉つて『芸能人の白木センパイ』とか言つたのよ」

「売れてないも何も、寿々菜が『デビュー』したのつて4月でしょ？ まだ3ヶ月しか経つてないじゃん。

これからよ、これから

「夏帆～！そんなこと言つてくれるの、夏帆だけよ～」

寿々菜はローテーブルの上に身を乗り出し、嫌がる夏帆を無理矢理抱き締めた。

長谷部夏帆は、中1からずっと寿々菜の親友で、見た目も中身も委員長タイプの女の子だ。

恋愛やお洒落に興味がないのか、クラスでも余り目立たず、演劇部にも寿々菜とのお付き合いで入った。

KAZUのことでキヤーキヤー言つてゐる寿々菜を妹のよつな目で見ている。

寿々菜がそんな夏帆との秘密の小部屋を教壇の下に見つけたのは、中1の文化祭の後、部室の掃除をしてゐる時だつた。

寿々菜と夏帆が通つて いるこの蒼井中学校の歴史は古い。

校舎は増改築が繰り返され、新しい部分と古い部分がチグハグなパツチワークのように組み合わされて建つて いる。

そのせいで、校舎のところどころに取り残された空間があり、この秘密の小部屋も昔は普通の教室だったようだが、増改築の際、一部だけがこんな形で残つたらしい。

部室の下の誰も知らない小さな空間。

寿々菜と夏帆は秘密基地を見つけたようなワクワクした気分になり、以来、給食の後は2人でこの小部屋でお菓子を食べたりおしゃべりをしたりしている。

夏帆がふと窓の外を見た。

「」の窓、不思議だよね。校庭から見ても窓はちゃんと見えるのに、誰もここに部屋があるなんて気付かない

「夏帆・・・私の『これから』って話はどうなつたの？」

「ああ。ま、それは寿々菜が頑張るしかない」

「そりだけど」

寿々菜は大海に放り出されたカエルのような気分になつた（ちょっと違つた）。

その時、窓の外を見ていた夏帆の表情が固まつた。

「あ」

「どうしたの？」

「・・・見て、あれ」

夏帆が運動場の隅を指差す。

外で使う備品が置いてあるプレハブ小屋の影だ。  
ちょうど運動場からは死角になっているが、  
寿々菜達がいる小部屋からはばっちり見える。

「あそこにいるのって、大橋先生と中村先生？」  
「みたいね」

夏帆が少し無表情に頷いた。

大橋先生とは、寿々菜たちも教えてもらっている世界史の教師で、  
28歳のちょっととかっこいい先生だ。

一方の中村先生はお嬢様風の保健室の先生。

今は確か26歳くらいだが、彼女が赴任して来た時は自主的に体調  
が悪くなる男子生徒が続出した。

「なんか、怪しげじゃない？」  
「えー・・・？」

えー、と言いつつ、寿々菜にも2人が怪しげなのは分かった。  
2人の距離はとても普通の教師同士のそれではない。

なんか、キスでもしそう。

寿々菜がそう思つたと同時に、2人は本当にキスを交わした。

「うわ！」  
「やつちやつた！」

寿々菜と夏帆が一緒に声を上げる。

もちろん、大橋と中村にその声が届くはずはなく、2人のキスは続いた。

「す、いーーー学校で教師同士がキスなんて」

「う、うん。そうね・・・」

お子ちゃまな寿々菜には少々刺激が強い。

夏帆も「うーーー」とに関しては寿々菜と同じくお子ちゃまのはずだが、肝が据わっているのか一向に動じる気配はない。

そして寿々菜は、大橋と中村のキスを見ながらあることを思い出していた。

寿々菜が森田に対してもいい印象を持つていらない原因を。

## 第4話 蒼井中の七不思議

夏帆は教師同士のキスシーンに真剣に見入っていたが、寿々菜はそれが半年前の「あの時」とダブリ、思わず目を逸らした。

そう、半年前の・・・ちょうど同じ時間頃。

あの日の昼休み、夏帆が教師に職員室へ呼ばれ、寿々菜は先に一人でこの小部屋に来ていた。

1人でお菓子を食べてもつまらないし、KAZUJIが出てる雑誌でも見てようかな・・・

そんなことを考えながら、何気なく窓の外へ目をやると、倉庫の端に一つの人影が見えた。

森田とその彼女だ。

2人は今月2年生になつたばかりの同級生同士で、確か4、5ヶ月前から付き合っている。

美男美女カップルであることは、寿々菜も認めざるを得ない。

ただ注釈を入れておくと、森田はその前にも3ヶ月ほどだが別の女子生徒と付き合っていた。

更に注釈を入れておくと、寿々菜はまだ誰とも付き合ったことがない。

寿々菜が「あんなところで、何してるんだりつ~」と思つ間もなく  
人はキスを交わした。

な、なんてことを…！！

寿々菜は真っ赤になつた。

しかも2人のキスは、桜舞う春風の中、しばし見つめ合い・・・  
といふロマンチックなもの（寿々菜的には）ではなく、  
「じく当たり前」といつた感じの軽いキスだつた。

現にキスの後、2人はお互ひハニカミ合づ訳でもなく、  
何事もなかつたかのように校舎の中へと入つていつた。

中学生のくせに、信じられない！！

寿々菜自身はもちろんキスの経験はないが、テレビドラマや映画で  
キスシーンなんか何度も見たことがあるし、寿々菜の同級生の中にも  
「彼氏とキスしちやつた」という女子は何人もいる。

しかし目の前で、しかも後輩が、しかも寿々菜にとつては煙たい存  
在である森田が、

キスをしているのを見るのは予想以上に衝撃的だった。

だが、先日デビューしたばかりとはいえ芸能人として寿々菜は、  
「い、今時の中学生、キスの一つや二つ、常識よ！」と何故か自分  
に言い聞かせて、

その場は（寿々菜の中で）丸く収まつた。

ところが。

それからわずか1ヶ月後、耳を疑うようなニュースが飛び込んできた。

なんと、森田が彼女と別れたというのだ。

キスまでしといて別れるなんて、ありえない！

人生の諸先輩方、更には諸後輩方からも「意見があるかとは思うが、とにかく純情な寿々菜的には「ありえない」ことなのだ。

それ以来、寿々菜にとって森田は「煙たい」に加え「ありえない」存在になつた。

遠くに予鈴が響く。

「夏帆、予鈴！教室に戻ろ！」

「・・・」

「夏帆？」

「...」めん！大橋と中村のキスに見入っちゃつた

ハツとしたように夏帆が窓から顔を離す。

「えらいモン見ちゃったね、寿々菜」

「そうね。でも、黙つといた方がいいかも」

「うん・・・でも、言いふらしたい！！」

夏帆はウズウズした感じで立ち上がった。

と言つても、きちんと立てば天井に頭がぶつかるので中腰だ。

・・・あれ？ なんだろ、これ・・・

寿々菜は夏帆の後姿を見ながら首を傾げた。  
何とも表現し難い違和感を感じたのだ。

なんか、引っかかる。

なんだろ？ ・・・

「夏帆」

「何？」

夏帆が天井の扉を上に押し上げながら、まだ座っている寿々菜を見下ろした。

「さつきの大橋先生と中村先生なんだけど・・・」

「うん」

「・・・うん、やっぱりいいや」

上手く言えない。

だが、何かに激しく違和感を感じる。

しかし寿々菜はその正体が分からぬまま、小部屋を後にした。

「キスと言えば」

教室に向かう途中、1階の生物室の前で夏帆が足を止めて言った。廊下を挟んで生物室の向かいの壁に大きな鏡が貼り付けてあり、夏帆はその鏡を見ている。

「出た、らしいよ？」

「出たつて何が？」

寿々菜が訊ねると、夏帆はもつたいぶつて声を潜める。

「幽靈」

「・・・幽靈？」

この手の話には弱い寿々菜。

「弱い」というのは「目がない」という意味ではなく、本当に「弱い」のだ。

幽靈と聞くだけで、青くなる。

「1週間くらい前かな。部活で遅くなったカッフルがここでキスしてたんだって。

そしたら、鏡の中に、白い服を着た女の子の幽靈が現れたらしいよ！」

「ま、まさか・・・」

「本当だつて！私、そのカップルの彼女の方から直接聞いたんだも

ん」

「・・・嘘」

友達の友達のお姉さんの親友の話、とかじゃなくて？

夏帆の友達の話となるとなんだか一気に身近に、  
そして本当に思える。

「森田君も、聞いたつて言つてたし」

「・・・」

少し真美味が薄れる。

夏帆が時計を気にしながら、再び廊下を歩き始めた。

「蒼井中の七不思議って、本当なのかなあ

「な、七不思議？」

「寿々菜、知らないの？」

一つ目が、夜、突然鳴り出す音楽室のピアノ。

二つ目が、同じく音楽室の、血の涙を流すベートーベンの肖像画。

三つ目が、何の前触れもなく全滅する水槽の魚達。

四つ目が、勝手に動く生物室の人体模型。

五つ目が、プールの中に住む、謎の生き物。

六つ目が、体育倉庫に現れる死体。

そして七つ目が、夜な夜な校舎を徘徊する白い服の少女の幽靈

「・・・」

「本当だつたら面白いわよねー」

面白くない！！

幽霊なんて・・・七不思議なんてありえない！

しかし、「七不思議と森田君、どっちの方が『ありえない』だろ？」  
と、

よく分からぬ比較をしていた寿々菜だが、  
もつと「ありえない」ことが自分の身に起こるうとは、  
この時はまだ夢にも思つていなかつたのだった・・・

## 第5話 呼び出し

まず第1の「ありえない」とは、教師同士のキスを見た日の夜に起きた。

後から思えば、これが一番「ありえない」ことだったのかもしれないが・・・

「寿々菜——電話よーー！」

1階から母親の声がする。

2階の部屋にいても、充分に聞こえる大きさの声だ。  
しかしこれは寿々菜の母親にとって大声ではなく、ぐく普通の声である。

「はーい！」

寿々菜も負けじと（？）大声を張り上げた。

デビュー以来、寿々菜は携帯電話を持っている。

いつ事務所から連絡が来るか分からないし、

突然仕事が入つて学校から仕事場へ直行する時などに、家に連絡しやすいからだ。

・・・まあ、ご承知の通り、そんな状況は今後1年以上、ほとんど発生しないのだが・・・

それは今はまだ寿々菜には内緒にしておくとして。

家に電話をかけてくるということは、寿々菜の携帯の番号を知っている家族・事務所の関係者・夏帆と数人の友達、以外ということになる。

でも、それ以外で私に電話して来るって誰だろ？

「2階のコードレスで取つてーー森田君つて子からよーー。」

森田君！？

つて、あの森田君！？

寿々菜の知つている「森田君」と言えれば、「煙たくてありえない」存在の「森田君」しかいない。

しかしその「森田君」が自分に電話してくるとは思えない。

寿々菜は、両親の寝室に置いてあるコードレスホンを恐る恐る取り、青く点滅しているボタンを押した。

「・・・もしもし」

「あ、白木センパイ？」

・・・森田君だ。

寿々菜は愕然とする同時に、背中に汗が流れた。

何の用だらう？

田障りだからもひ學校に来るな、とか？

電話を耳にあてたまま、両手でギュウッと握り締める。

しかし、電話の向こうから聞こえてきたのは、意外な言葉だった。

「今、暇？」

「うん、暇、だけど・・・」

「今から、出てこれる？」

「え？ 今から？」

思わず話に驚きながらも、スカートのポケットから携帯を取り出して時間を見る。

（コードレスホンで電話をしながら、携帯を見るところのもおかしな話だが・・・）

夜の9時だ。

暇は暇だが、外出するような時間でもない。

第一、こんな時間に森田が寿々菜に何の用だといつのだらう。

寿々菜が返答に困っていると、

森田が珍しく情けない声を出した。

「ちょっと頼みがあつて・・・白木センパイじゃないとダメなんだ。

学校まで来れる?」

「学校?」

「うん」

「・・・」

行けなくはない。

だが、行つてやる義理もない。

ううん!

森田君は演劇部の後輩なのよ!

後輩が困つてるんだから、先輩として助けてあげなきゃ!

「分かつた。行くわ

「ありがと」

森田君に「ありがと」なんて言われたの、初めてじゃないから、などと思いながら、お人好しの寿々菜は出掛けの仕度を始めた。

「あはは。やっぱ制服で来たんだ」

昼間より大きく黒く感じる校門の前で、

森田はセーラー服姿の寿々菜を見て小声で笑った。

「だつて、学校に行くんだったら、やっぱり制服かなと思つて・・・

森田君だつて制服じゃない」

森田が、やつをまだとは違つて「ヤツ」とした笑顔で学ランの首元を指でつまんだ。

「白木センパイなら制服で来るかなと思つて、会わせてみた」

「・・・あつやつ」

思考回路を読まれてこむ『気がしてなんだか情けない。しかし、事実やつである。

「そんなことより、何の用なの？」

「今度の部活紹介の時に演じる劇の台本を部室に忘れたやつだ。  
取りに行くの、付き合つてくれない？」

「・・・は？」

「白木センパイ、今度の劇の責任者だろ？」

確かにやつである。

来週、新1年生に対しても部活紹介があり、演劇部は当然劇を行つ。  
そして寿々菜がその責任者なのだ。

寿々菜がそんな大役を担うなんて信じられない方も多いだろうが、  
持ち回りなので仕方がない。

実際は、夏帆が何も言わずにサポートしてくれているので、  
なんとか成り立つているようなもんである。

「だからって、どうして私が森田君と一緒に忘れた台本を取りに行  
かなきゃいけないの？」

「ちやんと家でも練習しどかないと、本番で失敗しちゃ洒落になら  
ないだろ？」

だから台本をびいどりても取りに行きたいんだけど……その……

「一人じゃ怖いし」

森田の声が段々と小さくなる。

寿々菜があっけに取られていると、顔を赤くした森田が置み掛けるようにして言った。

「とにかく！ 台本を取りに行きたいんだよー責任者なら付き合え！」

「う、うん、いいけど・・・」

「じゃち来いー！」

頭から湯気でも出しそうな勢いで、森田がドスドスと学校の堀に沿つて歩き始めた。

寿々菜は森田の後ろを歩きながら笑いを噛み殺した。

怖い、って！！

あの森田君が！！

寿々菜も夜の学校は怖い。

職員室はまだ明かりがついているが、それ以外は真っ暗で、まるで昼間とは別の建物だ。

しかし、今の森田を見ていると笑わざにはいられない。

「プププ」

「・・・笑うな」

「笑つてないもん。 ププ」

「・・・」

「ねえ、どこから学校に入るの？正門は閉まってるわよ」

「分かってる」

「学校に電話して先生に開けてもらひつつ、正直に忘れ物を取りに行くつて言つたらいいじゃない」

「漫[まん]画も台本と一緒に置いてあるから、先生には内緒で取りに行きたいんだ」

「ふーん」

ま、いいや。

寿々菜は森田と共に、正門よりだいぶ高さの無い裏門を乗り越え、夜の学校へと忍び込んだ。

## 第6話 生物室

「どうして、この窓の鍵、かかつてないの？」

迷ひごとなく校庭をつつきりつて生物室へ向かい、その窓の一つを外から開いた森田に寿々菜は訊ねた。

「（）の窓の鍵、壊れてるんだ」

「へー」

どうしてそんなこと知ってるんだろう、と思ったが、森田自身が遊んでいる時に壊してしまったに違いない、と勝手に結論づけて、

寿々菜は窓から生物室に入った。

着地に失敗して派手にしつもむをついたのは（）愛嬌である。

一方、華麗に着地を決めた森田は、そのまま真っ直ぐ生物室の扉へ向かった。

そこから廊下に出て、部室へ向かうつもりなのだろう。

寿々菜も慌てた立ち上がり、森田の後を追う。

しかしその時、田が黒板の横に立っているある物を捕らえて寿々菜は足を止めた。

骨と内臓だけでできた人体の標本である。

もちろん作り物だが、顔にぽつかりと開いた二つの空間は夜の闇より更に暗く、

ダランとしている両手両足は、今にも動き出しそうだ。

骸骨のくせして、どうして内臓はしつかりあるのよー。

と、震えながらも寿々菜にしては最もな突っ込みを心の中にして、再び森田の背中を両指す。

が。

「・・・廊下の向こうから、誰か来る」

「え?」

「足音がするー隠れろー」

森田はボーッとしている寿々菜の腕を引っ張り、机の下に飛び込んだ。

机と言つても普通の教室の机とは違つて、4人掛けの大きなもので、脚も4本の棒ではなく、前後が壁のようになつていて「匂の字型」の机だ。

この下に隠れていれば、覗き込まれでもしない限り見つからない。

しかしあまり状況が状況なので緊張してしまう。

寿々菜が、息が荒くなるのをどうしても押さえられずにはいる、森田の手が寿々菜の口を塞いだ。

そのことに驚いて、思わず声を上げそうになる。

生物室の扉がガラツと開き、懐中電灯の光が生物室内を照らした。

その光は天井を這い、寿々菜達が隠れている机の上を通り過ぎてい  
く。

寿々菜は息を殺したが、森田は果敢にも懐中電灯の光をやり過ぐし  
た後、

机からそっと顔を出した。

「井ノ口いのくちだ」

森田が息だけでしゃべる。

「井ノ口って、生物の井ノ口先生？」

「ああ。見回りに来ただけみたいだ」

井ノ口は50歳手前の穏やかな生物の教師で、寿々菜も気楽に話す  
ことができる。

今はもちろんそんな余裕はないが、見に来たのが井ノ口だと聞いて  
寿々菜は安心して森田の脇から顔を出してみた。

懐中電灯で天井を照らしているのは、確かに井ノ口だ。

光が再び寿々菜達の上に戻ってきて、2人は机の中に顔を引っ込め  
た。

それからじばらくして・・・おそらく1、2分だが、寿々菜には1  
0分にも20分にも感じられた・・・井ノ口は生物室から出て行つ  
た。

「あー、焦った。白木センパイ、大丈夫か？」

「・・・うん」

芋虫のよつて椅子の間から這い出て、寿々菜は床にペタンと座り込んだ。

「センパイ?  
「・・・」

まだだ。

なんだらか、この違和感。

寿々菜は、井ノ口が出て行つた扉の方を見た。  
何かに違和感を感じる。

でも、やはりその原因は分からぬ。

寿々菜がスッキリしない気持ちで考え込んでいると、突然森田が寿々菜の隣にしゃがんで・・・寿々菜に寄り添つよつてしてきた。

「な、何するのよ  
「おい、あれ・・・」

森田が声を震わせながら、黒板の横を指差す。

そこには先ほどと変わらず骸骨が・・・

「動いてるー?」

寿々菜と森田は思わずお互いの両肩を握り締めた。

さつきまでダランと垂れていた骸骨の両手が、万歳の格好のように

天井に向かつて高く上げられていたのだ！

「い、いつの間に・・・」

森田が恐る恐る骸骨に近寄る。

「森田君…やめよう…・・・怖いよ」

しかし森田は寿々菜の言葉を聞かず、なんと骸骨にそつと触れた。そのとたん、ガシャン！と音を立てて骸骨の両手が下がり、元通りのダランとした状態に戻った。

寿々菜は冗談ではなく飛び上がった。

「さつきまで確かに、この格好だったのに・・・見間違いかな・・・」

「いや、俺も見た。・・・もしかしたらあの七不思議、本当なのかもな。

白い女の子の幽霊も出たって言ひし

「やめてよー！」

寿々菜は本気で怒ったが、

寿々菜の方に振り返った森田の顔は妖しい笑みを湛えていた。

「おもしろそーじゃん」

「何がー？」

「他には、音楽室のピアノとベートーベンと・・・水槽とかがあつたな」

「だからー？」

「見に行こうぜ」

全力で拒否する寿々菜に構わず、  
森田は寿々菜を引き摺るよつとして生物室を出た。

どうして学校の音楽室の壁には必ず、  
ベートーベンやショーベルトの肖像画がずらつと貼つてあるのか。  
別に普通の学校の音楽のテストで「この人は誰でしょう」という問  
題は出ないのだし、  
もし出したとしても、音楽室でテストをしていたら、壁に答えが貼  
つてあることになる。

とにかく、音楽室の壁にベートーベンの肖像画なんか必要ない、  
と、寿々菜は思つ。

だが、貼つてあるものは仕様がない。

寿々菜は「僕は君にそんなに睨まれる覚えはない」とベートーベン  
から文句が来そうなくらい鋭い目つきで黒板の上のベートーベンの  
肖像画（正確には本物の肖像画ではなくカラー複数）を睨み上げ  
た。

「ベートーベンの絵つて、どうしてこんなに陰気臭いのかしら」  
「そーゆー性格だつたんじやねーの？」  
「ああ・・・自分で自分の耳を切り落としたんだっけ  
「それはゴッホだろ」  
「そんな音楽家いたつけ？」

「画家だつて」

「ふーん・・・せやああーー。」

急に寿々菜が悲鳴を上げた。

森田がビクッとする。

「ぐ、変な声出すなよー。」

「だつて今・・・見てー。」

寿々菜がベートーベンの肖像画の真下に森田を連れて行く。

「別に何にもねーじやん」

「でも今確かに、ベートーベンが泣いてるみたいに見えて・・・。」

その時、外の道路を走る車のヘッドライトが窓から差し込んでいた。  
それは黒板の上の壁に貼り付いている肖像画を順に照らしていく。

そしてベートーベンの肖像画に光が当たった。

「うわー。」

「ほらー。」

間違いなく、ベートーベンの肖像画から赤い涙が流れているのが見えた！

寿々菜は全身から血の気が引いていくを感じた。

それは森田も同じらしい。

それでも森田は寿々菜の肩を抱き、固まっている足を何とか無理矢理動かした。

2人ともベートーベンから田を離さないようつじして、ジリジリと音

楽室の扉へと後退する。

そして、森田の手が音楽室の扉にかかったその時、突然音楽室にピアノの音が鳴り響いた。

## 第7話 音楽室

「 も も も …… 」

「 なんだ！？」

ベートーベンの「運命」が鳴り響く中、

寿々菜が森田に飛びつき、森田も思わず寿々菜を抱き締めた。

それでもグランドピアノは鳴り止まない。

「 で、出よ！」

さすがの森田も肝を冷やしたのか、

寿々菜を抱いたまま音楽室の扉を後ろ手に開けた。

「 …… 待つて」

しかし今度は寿々菜が足を止めた。

暗闇の中、必死に目を凝らす。

「 鍵盤が動いてないわ」

「 え？」

寿々菜達がいるところからピアノまでは距離があるし、この暗闇だ。森田の目には鍵盤が動いているのかどうかなど見えない。

しかし唯一の取り得とでも言おうか、寿々菜はモンゴル人並みとまでは行かないまでも、かなり視力が良い。

何故か蓋が開かれたままのピアノの鍵盤は、間違いなく動いていた。

寿々菜は森田の手を肩から外すと、勇気を振り絞つて「運命」を奏でるピアノへ向かった。

やつぱり、鍵盤は動いてないわ。

じゃあどうしてピアノから音がするんだろう？

寿々菜がグランドピアノの中を覗き込もうとすると、寿々菜についた森田が寿々菜の肩を引っ張った。

「やめろよー危ないだろ！」「

「でも・・・ん？何これ？」

寿々菜はピアノ線と板の間に隠すように置いてあるソレをそっと取り出した。

森田も一緒に怪訝な顔つきでソレを見る。

「USB型のウォークマンと小型スピーカー？」

「鳴つてたのはこれだわ。ピアノじゃない」

寿々菜がウォークマンのボタンを押すと、「運命」は唐突に途切れだ。

「・・・なんだよー驚かせんなよーー！」

森田は大きくため息をついて、寿々菜の手からウォークマンとスピ

一カ一を取り上げ、  
憎々しげな目でそれを睨んだ。

「なんつーイタズラだ！誰がこんなことしたんだ！」  
「ねえ、森田君。もしかしたらベートーベンも・・・」  
「あ。そうか」

森田はウォーキマンとスピーカーを近くの机の上に放り出すと、  
ふわっと身軽に教卓の上に飛び乗った。  
更にそこで背伸びをして黒板の上からベートーベンの肖像画を剥が  
し、  
教卓の横で森田を見上げている寿々菜に手渡した。

「皿の下が濡れてる。っていうか、何か液体が塗られてるみたい  
「ちょい待て」

教卓からこれまたふわっと音も無く飛び降りた森田が、  
学ランのポケットから携帯を取り出して、その光をベートーベンに  
あてる。

ベートーベンの皿の下の液体が赤く光った。

「光があると赤く見えるような、特種な塗料を塗つてあるな  
「じゃあこれも、ヤラセなの？」  
「だるーな。つたく、手の込んだ」としゃがつて。なあ、ハンカチ  
持つてるか？」  
「え？うん」

森田は寿々菜からハンカチを受け取ると、音楽室の外の手洗い場へ  
向かった。

ハンカチを濡らして、液体を拭き取るつもりなのだろう。  
寿々菜と森田はこれがヤラセだと気付けたからよかつたが、  
他の生徒が見つけたら、大騒ぎになるかもしれない。

ほんと、一体誰がこんなこと・・・  
もしかしたら、さつきの骸骨も誰かの仕業かもしれない。

戻ってきた森田も同じことを考えていたらしい。  
カラー印刷なのでインクが落ちる心配はないが、  
それでもそつとベートーベンの肖像画をハンカチで拭きながら言つ  
た。

「どうする？他の七不思議もあたつてみるか？」

「うん」

「怖いもの知らずだな」

森田が苦笑する。

「だつて気になるじゃない。本当の七不思議か誰かの仕組んだヤラ  
セか。

それにヤラセだとしたら、誰が何のためにやつたのか」

「随分ミステリアスなこと言うじやん。

そーいや、白木センパイが好きなKAZUHIが『御園探偵』って探偵  
モノのドラマやってたな。

あれの影響？

否定はできない。

だが、寿々菜も生来、ミステリアスなことが好きな性格なのかもし

れない。

それに・・・やつを生物室で感じた違和感も氣になる。

寿々菜は、森田が肖像画を元の位置に貼るのを見ながら、残りの七不思議を思い返した。

骸骨の謎は解けていないが、七不思議は後4つ。

魚が死ぬ水槽、プールの中の謎の生き物、体育倉庫の死体、白い服の少女の幽霊。

「さて、どちらあたる?」

再び教卓から飛び降りた森田が、不敵な笑みで寿々菜に訊ねた。

「水槽つてこれ?」  
「これしかねーだろ」  
「そうだけど・・・」

寿々菜は拍子抜けした。

確かに、蒼井中にある水槽と言えば、下足室の脇に置いてあるコン

しかし・・・

寿々菜は手を膝の上に置き、少しかがんだ姿勢で水槽の中を覗き込んだ。

中では色とりどりの熱帯魚たちが泳ぎ回っている。

「水槽は本物よね」

「水槽はな」

そう。

水槽は本物なのだが、中で泳いでいる魚が本物ではないのだ。  
だが、おもちゃといつ一言で片付けてしまうにはもったいない代物である。

どの魚も実物大で造りも丁寧。

しかも重さを調整してあるのか、水槽の底にいる魚もいれば、水面近くにいる魚もいる。

それらが水槽内に取り付けられたモーターが作り出す水流に乗つて水槽の中をグルグルと漂う<sup>さま</sup>は、一見して本物の魚に見える。

もちろん寿々菜は毎日靴を履き替えるたびにこの水槽を団子にしているが、

こんなにしつかり見たのは入学式の日以来だ。

その精巧な造りに改めて驚かされる。

だが、どんなに精巧な造りでも、偽物は偽物だ。

「死によづがないじゃない」

「そうだけじゃ」

寿々菜はかがみ氣味のまま、  
森田は腕組みをしたまま、  
しばらく水槽を眺めていた。

すると。

水槽の底の方にいた魚達が、不意に浮き上がった。

それらはどんどん浮上していく・・・やがて水面に達した。

寿々菜と森田がポカンとしているうちに、次々と魚が水面に浮き上  
がる。

その光景はまるで・・・

「死んでるみたい  
「だな」

偽物の魚と言えども、気持ちのいい光景ではない。

寿々菜は顔をしかめた。

恐怖より不快感の方が大きい。

「これもトリックか?  
「どうかしら・・・」

寿々菜は水槽の中を凝視した。

魚達は全て、水流に乗つて水面を流れている。

そして寿々菜は見つけた。

その水流の中に、何か粒子のような物が混ざっているのを。

寿々菜はパツと立ち上ると水槽の中の水に人差し指を入れ、

それをペロッと舐めた。

「おい、何してんだ！毒でも入ってたらどうするんだよ…」

「平気よ。造り物の魚の水槽に誰が毒なんて…・・・しようばい」「え？」

「この水、しようばいわ」

森田も寿々菜に倣う。<sup>なぞ</sup>

「本当だ。海水、つつーか、食塩水だな」

「誰かが水槽の中のモーターの近くに塩を置いといたんだわ。それが水流に乗つて水槽の水に混ざつて、魚が浮いた」

「そうか。食塩水の中じや物は浮きやすいからな」

簡単なトリックだ。

しかし、問題は誰がこれをやつたかである。

寿々菜と森田が水槽を見ている時に魚が浮くようなタイミングで、塩を水槽の中に入れる・・・

塩がモーターの作る水流に乗つて水と混ざるのなど、大して時間はかかるない。

つまり、寿々菜と森田がここに来る直前に誰かが塩を水槽に入れたのだ。

誰かが私達の行動を見ているって事？

寿々菜は寒気がして、

モーターの音が響く下足室を見渡した。

## 第8話 プール

「なあ、もうやめよ! ば」

2人の目線のちょうど中間くらいの高さの金網を見ながら森田が言った。

「怖いの?」

「怖いっていうか・・・うん、怖いな。お化けや七不思議が怖いんじゃないくて、こういうことを仕組んだ人間がいて、そいつが近くにいるかもしれないってことが」

素直に森田が頷く。  
寿々菜も同感だ。

だが、だからこそ、残りの全ての七不思議も見ておきたい。  
仕組んだ人間と鉢合わせになることもあるかもしれないが、  
今のところその「誰か」は寿々菜達に直接危害を加えている訳ではないし、  
やはりその目的が気になる。

ただの冗談にしては手が込み過ぎている。

「夜の校舎もいい雰囲気してるけど、プールも負けでないな」  
「そうね」

一向に引き返さうとしない寿々菜を見て森田も諦めたのか、  
月明かりを頼りにプールサイドを囲っている金網に手をかけ、よじ  
登り始めた。

「どうなつても知らないからなー」

「自分の身は自分で守るわ」

「・・・はあ」

暗闇にガシャガシャと金網が揺れる音が響く。

寿々菜が無事プールサイドに着地できたかどうかは、敢えて割愛するとして、

とにかく2人はプールを覗き込んで啞然とした。

「あ、そつか」

「なーんだ」

季節は春。

当然まだプールの授業はない。  
つまり・・・

「水、入つてないじゃん」

「入つてるでしょ、一応」

「こんなのせいぜい20センチくらいだろ。それに、きつたねー！」

森田がわざとらしく顔をしかめる。

プールの中には、去年の水の残りなのか、雨水が溜まつただけなんか、  
藻が漂う緑色の水が少し入っているだけだった。

「こんだけ汚いと、なんか住んでもおかしくないな

「ツチノコとか？」

「・・・白木センパイの発想にはついて行けねー」

寿々菜と森田はどうしたものかとしづらーブールを覗き込んでいたが、

突然森田が靴を脱ぎ始めた。

「何してるの？」

「せつかくだから、入ってみよつぜ」

「ええ！？」

これにはさすがに寿々菜も怯んだ。

入ると言つても足が少し浸かる程度だが、  
それでもこの見るからにヌルヌルした水に入ろつとは思えない。

「なんだよ。白木センパイが言い出したことだわ」

「やうだけど・・・本当にに入るの？」

答えを聞く必要はなかつた。

森田は既に靴下も脱ぎ、制服のズボンを膝下までめぐり上げている。

もづーーーーー

寿々菜もヤケになつて靴と靴下を脱ぐ。

なんとなく森田には負けたくない（？）。

だが。

「～～～～うひょおおお～～～～

「さ、気持ち悪い・・・」

プールに入ったとたん、2人は足の裏のなんとも形容し難い感触に鳥肌が立つ。

「俺、今年のプールの授業、受けたくねー！」  
「私も！」

2人は少し爪先立ちになりながら、別々の方向にゅっくりと進んだ。寿々菜としては怖くて一人になりたくなかったのだが、森田に正直にそう言いつのは癪である。

「なんかいる？」

「いや、なんにも。アメンボくらいだな。あ、蛙発見！」

「嘘！？やだつ！！」

また鳥肌が立つ。

しかしその時、森田が妙な声を上げた。

「うわあ！」

「何！？どうしたの！？」

「な、なんか、今・・・」

森田が両手を広げて左足をそろそろと持ち上げる。

「・・・なんかが俺の足に触った・・・」

「・・・蛙じゃないの？」

「いや・・・なんか・・・毛がついてた・・・」

「・・・なんかが俺の足に触った・・・」

寿々菜はゆっくりと視線をプールの中へ落とした。  
そこには緑の藻が揺れているだけだ。

「何もないわよ

「だって、確かに・・・うわーまた！」

「ええー!？」

森田が今度は左足をプールに戻して右足を持ち上げる。  
バシャバシャと水音がして、輪がプール全体に広がつていった。

寿々菜ももう「癪だ」なんて言つてゐる場合ではない。

「森田君ー！」  
「あ、ああ

森田が寿々菜を振り返る。

その時。

バシャーン!!

寿々菜の後ろで大きな水音がした。

寿々菜が固まり、森田が目を見開く。

「森田君・・・」

「・・・なんだよ・・・」

「今、私の後ろ、何か・・・いた?」

「・・・うん」

「・・・」

「なんか・・・黒くてデカイものが跳ねた」

「・・・」

「・・・」

2人は無我夢中でプールから飛び出した。

「森田君！」

全力疾走でプールから離れることが約200メートル。体育館の裏手で、寿々菜が森田の手を引っ張つてようやく一人は立ち止まつた。

「なんだよ？」

「足が・・・」

「ん？ああ、大丈夫だよ」

大丈夫そうではない。

裸足でここまで走つてきたので、足の裏が擦り切れて血だらけになつていて。

寿々菜も裸足なのが、こちらは怪我一つしていない。

ここまで走つてくる間、森田は寿々菜に幅の狭い柔らかな土の道を走らせ、

自分はアスファルトの上を走つていたのだ。

二人は体育館の脇にある水飲み場で足を洗つた。

「あ、靴！靴下も…」  
「持つてきてくれるよ」

森田が寿々菜に靴下と靴を差し出す。

「ありがと…それに、足の怪我も」「めぐね  
「何が？」

森田は地面に「サッ」と座ると両手をついて足を少し持ち上げ、それを乾かすかのようにパタパタと動かした。

寿々菜も隣に座る。

「…」も静かではあるが、教室の中とは違ひ月明かりもあるし、虫の声や道路からの音もかすかにする。

夜風も心地よく、一人の恐怖は少しづやわらいだ。

「さすがに疲れたな」

「わづね…・もづ帰る？あ、でも台本取りに来たんだったね」

七不思議に気を取られてすっかり忘れていたが、本来の目的は森田の台本を部室に取りに行くことだ。

だが、さすがに森田ももうそんな気が失せてしまったのか、首を横に振った。

「わづいこや。今から帰つて練習する氣にもなれないし」「うそ…・・・わづきのプールの中の、なんだったんだ」「わ」「わーな。またおもちゃかもしれないし」

森田はそう言つたが、

寿々菜は、そして当の森田も恐らく、そうではないと思つていた。

自動で動くおもちゃなら、あの広いプールで森田の足に2回も当たるとは考えられない。

ラジコンのように誰かが操縦していたとしても、暗闇の中、それも緑の藻が張つているプールの中のおもちゃを正確に動かすのは不可能だろう。

二人はなんとなく沈黙したが、森田が唐突に場違いな話を始めた。

「白木センパイはどこの高校受けんの？」

「高校？えっと、一応北原高校を考えてるけど」

「北原？公立の？」

「うん。私の頭じゃ、あそこが精一杯だもん」「でも公立だつたら芸能活動しにくいだろ。私立にしたらいいじゃん」

そう言つてから森田は自分で「ああ、でも白木センパイはそんなに忙しくならないか」と付け足した。

寿々菜はムッとしたが、自分でも「そうかもしれない」と思つてるので反論できない。

「森田君は？2年になつたばっかりだから、まだ考えてない？」

「うん・・・でも、多分、朝日ヶ丘にすると思つ」

都内でも5本の指に入る、レベルの高い私立である。もちろん寿々菜には無縁の高校だ。

「そう。頑張つてね。森田君て成績いいんでしょ？大丈夫だよ、き

つと  
・・・

森田は何か言いたげな顔をしたが、結局何も言わないまま靴を履いて立ち上がった。

## 第9話 体育倉庫

「もう帰るんじゃなかつたのかよ?」

「さうだけど。せつかく体育館に来たんだから、見てこいつよ。死体が現れるつていう体育倉庫つてこの中でしょ?」

寿々菜と森田は、体育館の脇の水飲み場から、体育館の正面に移動していた。

体育館は校舎と渡り廊下で繋がれており、今はもちろんどの扉も施錠されている。

「さつきの生物室みたいに、どこかの鍵が壊れてたりしないの?」「さう都合よく壊れてるかよ。あ、でも、ちゅつと待てよ」

森田が体育館の壁沿いに歩き出した。

「入れるところ、あるの?」

「ない。でも、要は体育倉庫の中を見れたらいいんだが?」

森田はそう言つて足を止め、頭上を指差した。

そこには簡単な鉄格子のはめられた小窓がある。

「これ、体育倉庫の窓なんだよ。こいつから中を覗いたらいい

「そつか!なるほど!」

「でも、本当に死体なんかあつたら、警察沙汰だ。七不思議ビックリねーぞ」

「もつともである。」

森田はジャンプして鉄格子につかまると、懸垂の要領で身体をぐいっと持ち上げ、中を覗いた。

「誰もいねーよ。死体もない」

「本当に?」

「白木センパイも見てみたら?」

森田が地面に下り、寿々菜に場所を譲る。  
が。

「・・・私に懸垂ができると思つてゐるの?」

「だな。肩車してやるつか?」

「死んでもいやー」

そこで仕方なく森田が四つんばいになり、その上に寿々菜が靴を脱いで乗るところになつた。

「お、重い!何キロあるんだよー?そんなんによく芸能人なんかやつてられるな!」

「失礼ね!」

そうは言いつつ、やはり恥ずかしいのと申し訳ないのとで、寿々菜はなんとなく爪先立ちになつた。  
だからと言つて軽くなる訳でもないのだが・・・

「ほんとだ。誰もいない

「だろ?」

月明かりでうつすらと照らされている体育倉庫には、本来体育倉庫にあるべきものしかなかつた。

体操用のマットに、ボール類、バーのネット、飛び箱・・・  
窓は閉まっているが、見ているだけで体育倉庫独特の匂いがしてき  
そうだ。

暗いので隅々まで見える訳ではないが、誰もいないのは明らかであ  
る。  
もちろん、死体もない。

寿々菜は森田の背中から下りた。

「さすがに死体はないわね」  
「当たり前だ。気が済んだか？」  
「うん・・・でも、変ね」  
「何が？」

森田が背中をさすりながら立ち上がる。

「骸骨とプールはびつやつたのか分からぬけど、今まで散々手の  
込んだことやつとて、  
体育倉庫だけ何もなし、つていうのは変じゃない？」  
「さすがに死体は用意できないだろ」  
「だけどせめてマネキンとか」  
「・・・ある意味、死体より怖いな」

寿々菜は腕を組んで、鉄格子を見上げた。

実は窓からは見えないけど、中に何があるのかな？

それとも・・・

「体育倉庫つて、ここだけだっけ?」

「そりやそりや。そもそも倉庫なんて他に・・・」

「「あ」」

2人は同時に声を上げた。

「運動場の小屋があるー。」

昼間に、大橋と中村といつ教師がその影でキスしているのを見たばかりだ。

「そうだな。あそこは運動場で体育の授業やる時に使う備品とかボーラーがおいてあるから、

体育倉庫とも言えなくはない。でも、やっぱ死体はありえないだろ」「そうだけど、行くだけ行つてみよう」

寿々菜は気乗りしなさそつな森田を引つ張つて、再び運動場の方へ戻つていった。

昼間でも、運動場の一角にあるこの小屋付近はひと氣がなく、どこか薄暗い印象だ。

ましてや夜となると、気味の悪さは倍増である。

「見るな」さう見て帰るわざ

森田が薄気味悪そうに辺りを見回した。

「うん。 さつきみたいに懲とかないかな?」

「こんなちつこいフレハブに、窓なんかねーよ」

「じゃあ、鍵は・・・」

かかってるよね、当然。

そう思つて寿々菜がドアノブを回すと、意外なことにそれは何の抵抗もなくカチリと音を立てて回った。

寿々菜と森田は思わず顔を見合わせる。

「開いたよ」

「・・・ああ。 鍵の掛け忘れだろ」

「そつかな・・・」

寿々菜がゆっくりとドアを引く。

外もじゅうぶんに暗いと思っていたが、

窓一つないフレハブ小屋の中は、本当に真っ暗だった。

今寿々菜が開けた扉から入る月明かりが唯一の光だが、目が慣れずに、まだ中に何があるのか分からぬ。

しかし、次第に目が慣れてくる。

中にあるものは、先ほどの体育倉庫と大差ない。

ただ、運動場に引く白線の粉があるのか、どこか粉っぽい空氣だ。

寿々菜は小屋の中を見回し・・・最後に床を見た。

黒い皮製の靴が落ちている。

靴だけではない。

暗闇で見えないが、どうやら「本体」もくつついているようだ。

「も、森田君！――」

入り口に立っていた寿々菜が小屋から飛び出すと同時に、森田が中を覗き込む。

「・・・あれって・・・」

「人、よね・・・？」

森田がゴクリと唾を飲んで、小屋の中へ入つて行った。寿々菜もそうしたかつたが、足が動かない。

中から森田の声がした。

「大橋だ」

「世界史の大橋先生？」

「ああ」

森田が出てくる。

顔が青く見えるのは、月明かりのせいばかりではなさそうだ。

「後頭部にでつかいたんこぶがあつたよ。滑つて転んだのかな」「こんな時間に世界史の先生が運動場の小屋に1人で来て、滑つて転ぶの?」

「じゃあ、誰かに殴られたってか?それこそ、なんでこんなところで」

「・・・私、お昼休みにこの小屋の前で大橋先生と保健室の中村先生がキスしてるの見ちゃったの」

「中村!うわー、ショック。俺、結構好きなのに」

森田が本気でガツカリする。

「そんなこと言つてる場合じゃないでしょ!」

「んじゃ、中村が大橋を殴つたっていうのか?でも、中村はもう帰つてるぞ」

「どうしてそんなこと知つてるの?」

「帰り際に保健室に絆創膏を貰いに行つたら、『私も今から帰るの』って言つてたから」

「・・・無理矢理用事を作つて保健室に行つたのね?」

「べつにー」

「でも一度帰つて、また来たのかもしれないじゃない」

「大橋に会つたために?一日帰つたんだったら、わざわざ学校で会わなくとも、

どつか外で会えればいいじゃん。ホテルとか」

寿々菜が思わず赤くなる。

この手の話は、どんな状況でも苦手なのだ。

「とにかく、早く警察に・・・

その前に、職員室にいる先生に言つた方がいいよね?・井ノ口先生、まだ居るかな・・・」

その時、寿々菜の頭の中に、「違和感」という名の小石が転がり込んできた。

初めて見る小石ではない。  
今日の昼休みに見たのと同じだ。

あの時、ここで大橋先生と中村先生がキスしてて・・・  
私と夏帆がそれをこっそり見てて・・・  
小部屋の外から予鈴が聞こえてきて・・・

「・・・

「白木センパイ？」

寿々菜はジッと立ち尽くし、頭の中を転がる小石を追いかけた。  
小石を捕まえれば真実が分かる気がする。  
でも、捕まえたくない。

だって、捕まえてしまえば・・・

「森田君」

寿々菜は覚悟したように顔を上げた。

「ん？」

「台本を取りに来たんだよね？」

「へ？何を今更・・・まあ、そうだけど

「じゃあ、ちゃんと取りに行こうよ」

寿々菜の言葉に森田は田を丸くした。

## 第10話 犯人

森田が言つていた通り、台本と漫画は演劇部の部室の机の上にあつた。

「おおーお前に会つために、どれだけ苦労したと思つてるんだよー。」

森田は冗談ではなく感激して、台本（と、漫画）を抱き締めた。しかし寿々菜は森田のことを氣にもせず、ある一点をじつと見つめている。

森田が寿々菜に振り返つた。

「どーした、白木センパイ？」

「ねえ、ちょっと手伝ってくれる？」

「何を？」

「これを動かしたいの。一人じゃ重くて大変だから」

寿々菜は教壇を指差した。

「はあ？こんなもん動かしてどうするんだよ？」

「いいから！ほら、そっちから押して」

「へえへえ」

森田は仕方なく、愛しの台本と漫画を再び机の上に置くと、床にしゃがみ込むようにして教壇をグッと押した。

女の子の寿々菜一人ではなかなか動かすことのできない教壇だが、男の子の森田にかかるば、スーッと、とまではいかないにしても、

いつも簡単に動く。

教壇の下から、寿々菜には見慣れた扉が現れた。

「なんだよ、この扉？」

立ち上がった森田が、両手を腰にあてて訊ねる。

「こ下にね、小さな部屋があるの」

「部屋？」

「うん。私達の秘密の小部屋」

「私達？」

寿々菜は無言で力を込めて扉を引き上げた。

扉自体は大した重さではないのだが、今日は重の音のように重く感じる。

そして中を覗かないまま、声をかける。

「夏帆。いるんでしょ」

「・・・寿々菜？」

聞いている方がかわいそうになつてくるような、か細い声がした。  
しばらく待つてみたが、夏帆が出てくる気配はない。

寿々菜は思い切って、小部屋の中へ入った。

森田は黙つたまま、小部屋の入り口から少し離れたところに立つて  
いる。

何故だか分からぬが、寿々菜は森田がそうしてくれているのが嬉  
しかつた。

「夏帆……」

いつも通りの中腰で部屋の中を見回すと、制服姿の夏帆が、小窓から入つてくる月明かりを避けるようにして、部屋の隅で小さくなつていた。

だが、どんなに月明かりから逃げても、その制服が裂かれているのは隠し様がない。

寿々菜は息を飲んだ。

「……大橋先生が？」

「……うん……途中で逃げてきたけど……」

夏帆が胸の前でクロスしている腕に力を入れる。

寿々菜は目の前の光景が信じられなかつた。  
もしかしたら、と覚悟はしていたが、

やはりいつも一緒にいる夏帆のこんな姿はショックが大き過ぎる。

怒りとも失望とも恐怖とも取れる感情が小部屋の中に渦巻く。

「私と大橋先生……付き合つてゐてほajiやないんだけど、  
大橋先生は、私が大橋先生のこと好きなのを知つてるし、  
学校の外じゃ会つてくれなかつたけど、学校では他の生徒とはちょ  
つと違つた目で見てくれてたの……それに、キスくらいは……」  
「……」

ところが今日の昼、その大橋が中村とキスしているのを見てしまつ

たのだ。

寿々菜があの時感じた違和感は、2人を見る夏帆の嫉妬の目に対してだつたかもしだい。

「私、学校に残つて他の生徒や先生が帰るのを待つて、運動場の小屋の前に大橋先生を呼び出したの。どうしてここで中村先生とキスしてたんですか、って責めたら、いきなり先生が・・・だから、私、思わず小屋にあつたモップで・・・」

言葉にならないのか、夏帆は声を詰まらせた。

小部屋から部室に上がると森田はおらず、学ランが机の上に置かれていた。

寿々菜はそれを夏帆に着せてやり、抱き締めるよじりにして摩り続けた。

「どうしよう、私・・・」

夏帆が真っ青になつて震える。

「気にする」とないよー正当防衛だもん!」

しかし寿々菜がどんなに励ましても、夏帆は首を横に振るばかり。

「私も大橋先生とそうなつてもいひつて、ずっと思つてたから・・・」

「でも、嫌がつたんでしょう？それでも止めてくれなかつたんだから立派に正当防衛よ！」

幾度となくこんなやり取りが繰り返されたが、夏帆の様子は変わらない。

寿々菜としては、このまま黙つて夏帆を逃がしてやりたい。  
夏帆は何も悪くない。

だがそうすると、大橋を殺したのが夏帆だと警察が気付いた時に、「正当防衛なのに何故逃げた？」と言われかねない。

そんなの、決まつてるじゃない！

恋人だつた先生に襲われたから殴つたら死んじやいました、なんて言える訳ないでしょう！？

寿々菜はまだ見ぬ鬼刑事に、心の中で猛然と抗議した。

だが、さすがは頭の良い夏帆。

気分は沈んだまでも、状況を判断する冷静さは持ち合わせていた。

「あのまま大橋先生の死体を置いといて、朝誰かが見つけたら大騒ぎになるよね・・・

ちゃんと、他の先生と警察に話さなきゃ」

「夏帆・・・」

「心配かけてごめんね、寿々菜。ありがと。でも、私がここに居るつてよく分かつたわね」

「うん、なんとなく。夏帆ならここに居ると思つたの」

「ふふふ。私、逃亡犯にはなれないなあ。寿々菜にすぐに見つかっちゃう」

少し笑顔になつた夏帆を見て、寿々菜の方が泣きたくなつた。  
といひが。

「おい。誰の死体だつて？」

突然カツターシャツ姿の森田が戻つてきて、口を挟んだ。  
走つてきたのか髪は乱れ、息も上がつている。

「誰つて・・・大橋先生よ、もちろん」

「は？ 大橋は死んでないぞ？ 死んでもいいけど」

「・・・へ」

「まあ、風邪くらいは引いてるかもな」

森田が携帯を取り出し、写真が入つているデーターポックスを開いて寿々菜と夏帆に渡した。

そこには、小屋の中で倒れている大橋が映つている。

寿々菜と夏帆は目を逸らそうとしたが・・・

思わず写真を凝視して、それから真っ赤になつて慌てて携帯を閉じた。

「・・・ちょっと一ビューブ」と一ビューブして大橋先生の下半身が裸なの？」

「今、ちやちやっと脱がして写真撮つてきた。

この写真さえあれば、大橋も大人しくせざるを得ないだろ。  
別に脅迫しなくとも、目が覚めて自分の格好見たら、何をされたか想像つくだろうし」

「目が覚めたらって・・・大橋先生、死んでないの?」

「誰が死んでるなんて言った?思いつきり生きてるつて。たんごぶ

作つて氣絶してるだけだ」

「・・・」

寿々菜と夏帆は手を取り合つて、その場にヘナヘナと座り込んだの  
だった。

## 第11話 幽靈

「おい。帰るぞ、早とちり2人組  
「・・・」

悲しいかな反論できない。

寿々菜と夏帆は小さくなつて森田の後をついて行つた。

校舎の階段を下りながら、森田が左向きに振り返る。

「モップで殴つて倒れたらくらいで、死んだつて思いますか、ふつー

？」「  
・・・はい」

今度は右向きに振り返る。

「人が倒れてたら、死んでるつて思う前に、気絶してるんじゃない  
かとか病氣で倒れたんじやないかとか思つて、確認するだろ、ふつ  
ー」

「・・・だつて、七不思議で体育倉庫に死体が現れるつていうのが  
あるから、  
てつきり・・・」

夏帆が森田の言葉に素直に反省したのに対し、

寿々菜が言い訳しているのは、いたしかたない事かもしれない。

森田は再び左に振り返つた。

「でもまあ、大橋が生きててよかつたですね」

森田がそう言つと、夏帆はホッとしたように頷いた。

「うん。どうして私、大橋先生なんかに夢中になつてたんだらう。  
なんか急に目が覚めた感じ」

「うんうん。そうよ！大橋先生には夏帆なんでもつたいなさすぎる  
！」

寿々菜も頷く。

夏帆はちょっと照れたように笑つた。  
いつもの夏帆の笑顔だ。

「でも、あんな人でも死んだら悲しむ人もいるだらうし、私も後味  
悪いし・・・」

ありがとう、寿々菜、森田君。2人のお陰で色々とサッパリしたわ。  
あ・・・森田君。学ラン、借りたままでもいい？」

制服がボロボロになつてしまつた夏帆は、  
まだ森田の学ランを羽織つている。

森田は、当然のように「もちろんです」と言つた。

「ねえ夏帆。取り合えずうちに来ない？私、制服もう一着持つてる  
から、貸してあげるよ。

今日はそれ着てお家に帰つて。つていうか、ずっと使っていいよ。  
お家の人に、今日のこと知られたくないでしょ？」

「うん・・・ほんとありがとう、2人とも」

夏帆の目にはまだ光る物がある。  
だがそれは、拭けば消える古い涙だ。

夏帆は「ちょっと顔洗つてくるね！」と言つて、廊下の奥へ走つて行つた。

寿々菜達は、ちょうど最初に寿々菜と森田が忍び込んだ生物室の前にいて、

近くにトイレや水場はない。

夏帆は少し離れたところにあるトイレまで行くつもりだらう。戻つてくるのに5・6分かかるかもしれない。

森田がポケットに手をつつこんで、壁にもたれる。が、すぐに背中を浮かして、今自分がもたれていた壁を見た。そこには鏡がある。

「なんだ七不思議だつたな」

「うん。でも、もうどうでもいいや。取り合えず夏帆が無事で、大橋先生も生きてたんだから…」

もちろん、誰が何のために音楽室のピアノとベートーベンの肖像画、それに下足室の水槽に細工をしたのか分からぬまだし、生物室の骸骨が勝手に動いた謎とプールの中の生き物については、本当に七不思議なのか、それとも人為的なものなのかも分からぬい。

訣然としない物は残るが、とにかく今の寿々菜には夏帆の無事と無実が全てである。

「音楽室と水槽は、もしかしたら大橋がやつたのかもな」

「大橋先生が？どうして？」

「長谷部先輩に小屋に呼び出された時点で、話の内容は分かつてたんだろ。

生徒である長谷部先輩ともめるのは避けたかったから、  
長谷部先輩をビビらせて家に帰らせようと思つて、小細工したのか  
もよ

「うん……そろがもね」

だけど結局ビビッたのは寿々菜と森田で、

夏帆はおれりく七不思議に関しては何も見ていない。

やはり、寿々菜はつきりしないのだが……

「もう言えれば、最後の七不思議はどうなったんだらう?」「

「最後の七不思議?」

「白い服の少女の幽霊つてやつよ」

「ああ。ここでキスしてるカップルが、この鏡の中で見たつてやつ  
か」

森田が壁の鏡を「ン」と叩いた。

「それじゃ、ただの見間違いだろ」

「でも、他の6個は実際に起こったのよ?」

「『死体』はともかく、な」

「……」

森田の嫌味つぽい方に寿々菜がむくれていて、  
森田がケラケラと笑いながら寿々菜の腕を引き、鏡の前に立たせた。

「じゃあ、本当に幽霊が現れるか試してみよっぜ」

試す?何を?

寿々菜がそう聞くより早く、森田の唇が寿々菜のそれに触れた。

寿々菜は「ピキーン」という音がしそうなくらい硬直して息を止めたが・・・

森田はすぐに寿々菜から顔を離して、ゆっくりと鏡の方を向いた。

森田が目を見張る。

その森田を見て、寿々菜も硬直が解けた。

そして、怒るのも驚くのも忘れて、森田と同じ方向を見る。

そこには、白い影がボンヤリと浮かび上がっていた。

落ち着け。

落ち着け、私。

これは、ただの鏡よ。

お化けなんている訳ないじゃない。

そう、ただの鏡なんだから・・・

ただの鏡。

と、いうことは

寿々菜は、今度は顔を反対方向へと恐る恐る向けた。

森田も同じことを考えていたらしく、寿々菜と一緒に顔を動かす。

生物室の扉の窓から射し込む月明かりを背に、白い服の少女が立っている。

黒く厚い前髪の下から、大きな黒目勝ちの瞳が寿々菜と森田をじつ

と見ていた。

その少女の赤い唇の両端が、キュッと上がった瞬間。

寿々菜と森田は夏帆のことをすっかり忘れて、  
一目散に校舎から飛び出したのだった・・・。

## 第1-2話 再び1年半後

あの時は、本当に怖かつたなあ。

講演会場である図書室へ向かう途中、寿々菜はあの生物室の前に足を止めた。

1年前、少女の幽霊を映し出した鏡をそっと触る。

あの翌日から、寿々菜と森田は以前ほど不仲ではなくなった。それはキスしたからではなく、一緒に恐怖体験をして一種の絆が生まれたからだ。

そして、寿々菜と森田が「あの夜のこと」を話しているのを誰かが聞いたのか、

七不思議は本当らしい、という噂が蒼井中内を席巻した。

と言つても、もちろんそれは生徒達の間だけのことで、教師達は迷惑がりつつも、「ああいうことで騒げるのは若い証拠だな」と微笑ましく思つていたようだ。

ちなみに大橋は何事もなかつたように授業を行い、平氣で夏帆を指したりした。

寿々菜は改めて大橋に怒りを覚えたが、夏帆自身が「もういいの」というので、

仕方なく目を瞑ろうとした・・・が、やはり、許せない。

という訳で、夏帆と森田と相談し、大橋のハズカシイ写真を職員室の大橋の机の中にこっそり入れておくといふ、ささやか復讐を実行した。

[写真を見た時の大橋先生の顔、今でも忘れられないな！

寿々菜は一人でニヤニヤしながら、何気なく生物室の中を、扉についている小窓から覗いた。

あの時同様、黒板の横に骸骨が立つている。

もちろん万歳などしておらず、両手はダランと垂れ下がつたままだ。

扉に手をかけると鍵はかかつておらず、寿々菜は生物室の中へ入つてみた。

あの後しばらくは、生物室に近づくのも嫌だったが、さすがにもう卒業したし、今は朝だ。

こんな時間に七不思議も何もないだろ？

今では、森田とのキスを含め、あの夜のことは夢だったんじゃないとかとさえ思える。

寿々菜は生物室の中をゆっくり歩いた。  
小学校のように「机と椅子つてこんなにちっちゃかったかなあ」とは思わないが、

なんだか全てが小さく感じる。

実際、高校の生物室の方が大きいせいもあるかもしれない。

天井も・・・って、さすがに天井は低くはないか。  
秘密の小部屋じゃあるまいし。

そう思つて天井を見上げた時、寿々菜の目がある物を捕らえた。

あれ？どうしてあれが、あんなところにあるんだろう？  
・・・まさか・・・

「白木？」

突然声をかけられ、寿々菜はビクツとして振り返った。  
見ると、扉のところに生物教師の井ノ口が立っている。

数ヶ月振りの井ノ口の頭には、白い物が増えた気がする。

「井ノ口先生！お久しぶりです」  
「ああ。頑張つてるみたいじゃないか。今日もうすこで講演会するんだろ？聞きたいくよ」  
「はい・・・でも、恥ずかしいから、聞きたくくれなくていいです」

謙遜ではなく本気でそう言つと、井ノ口は懐かしい笑顔になつた。

「相変わらずだな、白木は」  
「先生じゃ。・・・先生」  
「ん？」  
「先生も、相変わらず放課後にこここの天井のチェックをしてるんですねか？」

寿々菜の言葉に、井ノ口の顔から笑みが消えた。

「なんのことだ？」

「ずっと引っかかつてたことが、やつと分かりました。井ノ口先生、去年の4月に私と森田君がここに忍び込んだこと、知つてたんですね？」

「・・・」

「音楽室のピアノやベートーベン、水槽に細工したのは先生でしょ？目的は多分・・・」

寿々菜は天井を見上げた。

「あれ、ですよね？」

そこには小さな扉があつた。

演劇部の部室の教壇の下にある扉と同じ扉だ。

一見、配管チェックの時に業者が入るような扉だが、寿々菜はその向こうに何があるのか知つている。

「生物室の天井裏にも、部屋があるんですね？」

「・・・どうしてそう思つ」

「この学校、何度も増改築されてるから、昔の教室とかがとこねじこねに残ってるんです。」

「私、その一つを知つてます。そこにもこの天井にあるのと同じ扉がついています」

寿々菜は、扉の真下に移動した。

「井ノ口先生は、この上の部屋にある物を隠している。」

だから夜の見回りの時、無意識に天井ばかりを懐中電灯で照らしてたんですね。

それを見て私、おかしいなと思つたんです。普通、床とか壁を照らしますよね。

だけど、あの時はそれが分からず、ずっと引つかかってました。

・・・もしかして、今日もソレはここにあるんじゃないですか?「

寿々菜がそう言つと、井ノ口は呆れたように笑つて、生物室の扉を閉め、鍵もかけた。

「白木はドラマの中だけじゃなくて、現実にも推理じつをやつてるんだな」

「ちょっとした趣味です」

「迷惑な趣味だ」

井ノ口は靴を脱いで机の上に上ると、天井の扉を引いた。演劇部の部室にある扉とは違つて、当然下向きにパカッと開く。

井ノ口はその中に顔を入れると、中に向かつて何かを話した。

・・・ほどなくして、井ノ口が天井の扉から顔を出し、続いて、女の子の顔がそこからひょこひょこと出てきた。

分かつっていたことなのだが、寿々菜は心臓が飛び出るほど驚いた。

井ノ口が少女の脇を持つて、天井裏から机の上に下ろしてやる。ジーンズのショートパンツに半袖のシャツを着た、見たところ10歳くらいの少女である。

真っ黒なおかつぱが印象的だ。

「驚かせて悪かつたな。この子は和美<sup>かずみ</sup>。私の娘だ」

「この子が、白い服の少女の幽霊、ですね？」

「ああ。ちゃんとこの部屋の中にはいると言ひ聞かせてたんだが、退屈になつて出歩いた時に運悪くこの生徒に見られてね。その時白いパジャマを着てたから、あんな噂が立つてしまつた」

井ノ口が和美の頭をポンポンと叩きながら、申し訳なさそうな顔になる。

「どうしてこの部屋に和美ちゃんを？」

「この子の母親は、この子が小さい時に病氣で亡くなつてね。僕が1人で育てるんだ」

「・・・」

和美は父親の背中に隠れながら、おずおずと寿々菜を見ている。

「小学校に上がるまでは、保育園で夜遅くまで見てもうつてたんだが、小学生からは学童保育の後は家で1人で僕を待つてないといけなくなつたんだ。だけど和美は寂しがり屋で引っ込み思案だから、かわいそうで・・・それで、この天井裏の部屋で僕の仕事が終わるまで待たせるようになつた。ここなら、僕が時々見に来れるからね」

「そうだったんですか・・・」

「しかし、和美を見られてしまつた」

「それで、七不思議の噂を流したんですね」

井ノ口が頷く。

「白い服の少女の幽霊の話だけだと、目立つからね。他にも6つの不思議な噂を作つて、  
流したんだ。そうすれば、生徒達の噂話も幽霊のことだけじゃなく

なるし、

何より教師達が『ありがちな七不思議の噂だ』と思つて、怪しく思はない。

だけど、やつと七不思議の話が定着してきた頃、また和美が生徒に見られたんだ」

「こここの外の廊下でキスしてたカップルですね？」

「ああ。和美がトイレに行くために下りて来た時、偶然キスしているカップルを見つけてね。

興味本位で思わずじーっと見てたそんなんだ」

「だつて！」

突然、和美が高くて小さな声を上げた。

「あんなところでキスしてたら、見つかっちゃうよ…」

不本意とは言え同じ場所で同じ事をした寿々菜としては、耳が痛い。

「まあ。そうだな」「でも私に気付いたら、男の子は女の子を放り出して、先に一人で逃げちゃつたけどね」

そこは森田とは違う。

森田はちゃんと寿々菜と一緒に逃げてくれた。

井ノ口が和美から寿々菜に視線を戻した。

「だからもう一度、他の6つの不思議についても噂を強める必要があつた」

「それあの日、学校に忍び込んだ私と森田君に、色々な細工を見せたんですね」

「いや、違う

「へ？」

井ノ口は首を振った。

「僕が細工を見せたかったのは、君だけだ。森田は違う。森田は僕の協力者だ」

## 第13話 協力者

「協力者？」

寿々菜の表情が曇る。

まさか・・・

「森田は和美のことを前から知つてたんだ。ほら、森田って劇で役がある時は、いつも遅くまで残つて練習してゐるだろ?」「え?」

初耳だつた。

寿々菜は、森田の演技が上手いのは単に才能だと思っていたが、どうやらそうではないらしい。

演劇になんて全然興味ないくせに・・・

変なところで责任感強いんだから。

寿々菜はこそつと笑つた。

「それで、僕が帰る時に和美をここから出しているのを森田に見られたんだ。

仕方なく正直に説明したら、森田の奴『俺も母子家庭で育つたから

和美ちゃんの気持ちは分かる』と言つて、内緒にしててくれた。しかも、それ以来、放課後に時間がある時は、この天井裏の部屋で和美と遊んでくれてるんだ』

「今でも?」

「ああ」

寿々菜にとつては意外なことばかりだ。

思わずさつき井ノ口が森田のことを『協力者』と言つたのを忘れてしまいそうになる。

だが、さすがに寿々菜もそこまでとぼけていない。

「・・・もしかして・・・」

寿々菜が井ノ口を睨むと、井ノ口は頭をかいた。

『いや、申し訳ない。『七不思議の噂をもう一度広めたい』と森田に相談したら、

『誰かに実際に恐怖体験をさせて、噂を広めてもらつのがいい』って言われたんだ』

「・・・」

『で、細工は僕が考えたんだが、誰に見せるか悩んでもたら、森田が『うつてつけの奴がいる』って・・・』

「・・・」

光栄にも『うつてつけ』に選ばれた寿々菜は、一気に脱力した。  
井ノ口がフォローする。

『でも、森田は『白木センパイだけじゃかわいそまだから』と言つて、自ら白木と一緒に学校に忍び込むよう仕向けてくれたんだ』

「台本を忘れたって言うのは・・・」

「嘘だ。わざと台本と漫画を置いて帰ったんだよ」

「・・・」

「君達が入れるよう、僕が生物室の窓の鍵を開けておいた。骸骨のポーズを変えたのも僕だ。」

白木が机の下に隠れてる間にね」

「音楽室のピアノとベートーベンと、下足室の水槽も先生が？」

「ああ。でも、白木はそれで逃げ出すと僕も森田も思い込んでたけど、

白木は全部見破ってしまった。焦ったよ」

肩をすくめる井ノ口の後ろで和美が「うんうん」と頷いてい。どうやら和美も全て知っているらしい。

「そこで森田は、急遽プールで一芝居つたんだ」

「じゃあ、プールの中で何かが足に触れたっていうのは、演技だったんですか！？」

「そうだ。大した演技力だよな。僕もこいつそり見てて、思わず本当にプールに何かいるのかと思った。」

白木の後に石を投げて、何かが跳ねたように見せかけたのは僕だ」

演技・・・！

全部演技だったの！？

生物室と音楽室で怯えてたのも、

プールから慌てて飛び出して、足を怪我しながら走ったのも！？

寿々菜は愕然とした。

森田の演技力にも驚いたが、それを見抜けなかつた自分も情けない。

「大橋先生の件は後から森田に聞いたよ。あれは全くの想定外だつた。

白木には、怖い思いをさせて、悪かつた」「いえ・・・もういいです」

もはや怒る気力も出ない。

ちょうどその時、校内アナウンスで井ノ口が職員室へ呼び出され、井ノ口はもう一度寿々菜に詫びを言って、急いで生物室から出て行つた。

寿々菜と和美の2人がポツンと生物室に残つた。

先に口を開いたのは和美だつた。

「あの・・・白木さん?お父さんのこと、怒らないでね?お父さんは私のためにやつてくれたの」

「うん。分かつてる。怒つてないよ」

ちょっと怖かつたけどね、と心の中で付け加える。

すると和美はとたんに寿々菜に打ち解けて・・・は、くれなかつた。それどころか敵意をむき出しにした目で寿々菜を見ている。

「お父さんは知らないけど、森田君と白木さん、あの日キスしてたよね」

「あ・・・」

そうだ。和美には見られているのだ。

「あ、あれは森田君が、幽霊が現れるかどうか試すために・・・」「でも森田君は、幽霊の正体が私だつて知つてゐるのよ?」

あ、そつか。

じゃあ、どうして森田君は「幽霊が現れるか試してみよ!」って言つて、

私にキスしたんだろう。

試したつて出てくるわけないし、出てきたところではそれは和美ちゃんなのに。

その答えを知るには、寿々菜は少々お子ちやま過れる。

寿々菜より年下なのに寿々菜より「お子ちやま」ではない和美がため息をついた。

「もういいわ。白木さんと、森田君と付き合つてるの?」

「付き合つてるわけないでしょー卒業式以来、会つてもないしー」

「本当?」

「本当よー。」

ようやく和美の田が和らぐ。

「よかつた。森田君は絶対誰にも渡さないんだから」

「・・・和美ちゃんて、何歳?」

「12歳。小6よ」

寿々菜は、「女」を感じさせる小学6年生に舌を巻いた。

が、ここは一応年上の「女」として威儀を見せなくてはいけない。  
・・・「お子ちゃま」に無理は禁物だと思うのだが。

「か、和美ちゃん。森田君はきっと、明るくて元気な女の子が好き  
だと思うな。

今日は文化祭だし、誰だって学校に入つていらんだから、こんなと  
こに閉じこもつてないで、

遊ぼうよ

「・・・

「つこでにこの天井裏も卒業したりどうかな?

きっと森田君なら、外でも和美ちゃんに会つてくれるよ」

寿々菜としては、我ながらいい話をしてくれると思つ  
が。

「何言つてるのよ。来年には私、ここに生徒になるのよ? そしたら  
天井裏じゃなくて、  
堂々と教室でお父さんを待つてられるわ」

「や、そうね」

「この天井裏は小学校の間だけつて決めてるんだから。  
それに、今でもたまに森田君とは外でデートしてるもん」

「・・・

「でも、いくら『付き合つて』って言つても『和美が高校生になつ  
た時に俺に彼女がいなかつたらな』とか言つのよ! 私が高校生にな  
つた時つて、森田君は大学生よ! ? 彼女がいない訳ないよね! !」

憤然とする和美。

「誰が、寂しがり屋で引っ込み思案だつて？」

寿々菜が心の中でそう突っ込んだのは、無理からぬことだ。

「今日も、森田君がいるなら一緒に文化祭を見学したいけど、一人じゃつまんないし」

「あ、だったら、私と一緒に回らない？ 今から講演会に出なきゃいけないけど、

その後は暇だから」

「講演会？」

「うん。私、芸能人だから、それで、」

「芸能人？ 白木さんが？ テレビで見たことないけど」

「・・・」

子供は正直である。

「――この前、『御園探偵』にちよこいつと出たんだけど、

「えー？ それってKANBIIが出てるやつ！？」

「うん」

「私、全話見てるけど、白木さん出てたっけ？」

「・・・」

和美がピヨンピヨン飛び跳ねながら寿々菜の手を握った。

「ねえねえ、サインちょうだい！」

「え、サイン！？」

「サインなんて！」

・・・普通に「白木寿々菜」って書けばいいのかな。  
あ、でも芸名は「スウ」だつて。

なんとも情けない悩みである。  
しかし、悩みは不要だった。

「KANUのサイン！10枚ちょうどい！」  
「・・・なんだ、KANUのか・・・でも、どうして10枚も？頼  
んでみるけど」  
「友達にあげるのーあ、やつぱり11枚！  
私は特にKANUのファンってわけじゃないんだけど、自分でも一  
応持つておきたい！  
プレミア付くかもしれないもん」

ちやっこりした小学6年生である。

だが、寿々菜は和美と話しながら、あることを思い出していた。  
山崎の言葉である。

『君が書いた講演内容の案だが、こんな感じじゃ全然ダメだ』  
『聞き手は誰なのか、どうこう」と聞きたいのか、スウは何を伝  
えたいのか。

その辺のことを見く考えて、もう一度書きなさい』

寿々菜は腕時計を見て、  
「後、30分か」と呟いた。



## 第14話 再会

図書室の中は季節はずれなことに冷房が入っていたが、それでもこの大人数だと物凄い熱気だ。

ありがたいことに、といふか、困ったことに、といふか、スウの話を聞くために、生徒や教師だけではなく、文化祭に訪れた一般客まで図書室に来てくれたのだ。その中には、井ノ口親子の姿もある。

だが、寿々菜には分かつていた。

純粋に「芸能人をやつてる白木先輩」の話を聞きに来てくれた人もいるだろうが、

大半は「『御園探偵』でKAZUと共演したスウ」を見に来た人たちだ。

それは決して嘆くことではない。

もちろん寿々菜自身が注目を浴びるに越したことはないが、どんな形であれ興味を持たれるのは芸能人としては強味だ。それをどう活かすかは、寿々菜次第である。

寿々菜は用意されていた水を何度も飲みながら、話をした。そして1時間弱に及ぶ講演の最後を、

「これからも、支えて下さっているスタッフの方々と共に頑張つて行きたいと思います」という言葉で締めくくった。

「寿々菜さん！」

「武上さん…来ててくれたんですね…」

よつやく拍手が鳴り止んで講演会がお開きとなり、

寿々菜が数人から求められたサイン（寿々菜のサインである…）に

対応し終えた時、

図書室の一番端に立つて手を振つて居る武上に気が付いた。

「当たり前じゃないですか。寿々菜さんの大舞台ですよ…！  
殺人事件なんかに手を焼いてる場合じゃありません」

「や、そうですか」

さすがにそれはどうかと、寿々菜も思う。

すると、その寿々菜の心の声を代弁する者が現れた。  
いや、元々そこにいたのだが、気が付かなかつた。

「さつさと仕事に戻れよ、武上。殺人犯は待つてくれねーぞ」  
「つるわこ。今日は非番なんだ、ゆっくりさせろ。今回は出番これ  
だけだし」

「前、孤軍奮闘してたじやねーか。文句言つな」

「…・・したくてした訳じゃないけどな」

寿々菜は、腕を組んで壁にもたれている低い姿勢の青年を諂しげに  
覗きこんだ。

青年は上目遣いで寿々菜を見て、ニヤツと笑つた。

「・・・和彦さん？」

「おつ」

「ええ…？和彦さん…？」

寿々菜が驚くのも無理はない。

和彦は、全く変装していない。

しかし、いつもの小綺麗な格好とは違つて、ドラマの中でも着ないようなストリート系のファッショնに身を包んでいる。

それだけで、完全に「KAZUJI」でも「和彦」でもなくなつていて、寿々菜でさえ分からなかつたのだ。

「凄い！でも、こんなところでバレたら大騒ぎですよー。」

「ま、見てる。絶対誰も気付かないから」

「そうですね・・・でも、せっかくのお休みなのに、和彦さんまで来てくれるなんて嬉しいです！ありがとうございますー。」

「おー。なかなか良い話だつたじやねーか

「えへへ、そうですか？」

照れる寿々菜。

だが、珍しく武上が寿々菜に文句をつけた。

「まあ、悪くはなかつたんですけどね・・・僕としてはちょっと物足りなかつたです」

「ごめんなさい」

「いや、寿々菜さんが悪い訳じや、」

「あれで良かつたんですよ」

文化祭の委員と話していた山崎が寿々菜たちの所へやつて來た。  
満足そうな表情だ。

「山崎さん。お疲れ様でした」

「ああ、スウも珍しく頑張つたじやないか。入場料、設ければよかつたな」

ケチな門野社長の影響が山崎にも出ているらしい。

「ちゃんと僕が言つたことを踏まえて、話を考えたんだな」「実は考えたのはついさっきなんですけどね」

寿々菜が小さく舌を出す。

寿々菜の話の内容は、ほとんどがKAZU関係のことだった。だから武上にとつては「物足りなかつた」訳だが、今日ここに来た人の多くは、KAZUとはどんな人で、普段どんな生活をしていて、ドラマでどんなNGを出したり、どんなアドリブを入れたりするのか・・・

そんなKAZUの裏話を聞いたかつたので、寿々菜の話は充分「物足りる」ものだつただろづ。

寿々菜が当初考えていた自分の話が中心の講演内容では、聞いている方はつまらなかつたかもしだれない。なんと言つても寿々菜はまだ駆け出しアイドルで、普段の生活は一般人と変わらないのだから。

しかし、何もKAZUのことばかりを話した訳ではない。自分が芸能界に入った経緯や、駆け出しならではの失敗談なんかも所々に入れ、笑いも取れた。

そして、今自分がこうして芸能人としてなんとかやっていくてのは、家族と事務所を初め、多くのスタッフのお陰であることをしつかりと付け加えたのだった。

「いつかは、『スウ自身の話を聞きたい!』って言われるようにならないとな」

「はい!頑張ります!」

寿々菜が胸の前で両手でガツッポーズを作った、その時。

「あれー。なんだ、もう終わつたのかよ」

懐かしい顔が、図書室の扉の向こうから現れた。

「森田君ー。」

なんと松葉杖姿の森田が、そこに立っていたのだ。  
寿々菜は思わず駆け寄つた。

「足、大丈夫なの!?」

「こんなもん、へっちゃらに決まつてんだろ」

皿戻になるのがどうか・・・  
とにかく森田は胸を張つた。

「休みじゃなかつたの?何しに来たの?」

「白木センパイの失敗談を聞きに。でも、間に合わなかつたみたいだなー。」

せつかくこつそり病院を抜け出してきたのに

「な、何やつてるのよー。」

時間が昔に戻つたかのように一人でワイワイやつてこると、

面白くない顔をした和彦と武上が、寿々菜の後ろから森田を睨んだ。

その視線に気付き、森田が顔を上げる。

「あ。KAZUだ」

「・・・なんで分かるんだよ」

「見りや分かるよ」

「・・・」

森田に一発で見抜かれ、和彦は少々傷ついた。

こんな素人のガキにバレるなんて、俺もまだまだだな。

「よく分かったわね！ そうなの、この人がKAZUさんで、こっち  
が刑事の武上さん」

寿々菜が森田に2人を紹介すると、森田は「刑事？ すげー！」と言  
つて興奮した。

KAZUより武上に感激する森田に、和彦はますます面白くない。

「和彦さん、武上さん。この子は私の一つ下の後輩で、森田君って  
いうんです」

「じんちば」

森田が軽く会釈する。

さすがに和彦も武上も、大人として無視する訳に行かず、一緒に会  
釈を返す。

だが、寿々菜ではないが、和彦は寿々菜と森田の間にある微妙な違和感を感じ取った。

「こりや、ただの「先輩と後輩」じゃねーな。  
もしかして・・・

「おい、寿々菜。まさかコイツが寿々菜のファーストキスの相手か？」

「か、和彦さん！」

寿々菜が赤くなる。

森田とは、キスの話はタブーのように触れていないのだ。

しかし森田の方は、赤くなるでもなくキヨトンとしている。

「白木センパイ。あれがファーストキスだったのか？」

「う・・・うん」

「えー、そなんなんだ。あんなとこであんな風にやつちやつて、悪いことしたなー」

「いいよ、今更」

だが、「今更」では片付けられない男が2人。  
特に、いつでも拳銃をぶつ放せる方の男は、

「今日が非番で本当によかつた。もし非番じやなかつたら・・・」  
と考えながら、無意識にホルスターのついていないベルトに手を回したのだった・・・

「アイドル探偵7

寿々菜と七不思議編」

完

## 第14話 再会（後書き）

「アイドル探偵7」を最後まで読んで頂きありがとうございました。森田が登場しているせいか？いつもより読んで下さっている方が多い気がします（笑）本当にありがとうございます。

第6弾はすっとばしておりますが、既に第8弾は書きあがり、現在は第9弾も考えております。第9弾にもお馴染みの人物が登場するかも、です。

そちらもお楽しみに！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7260q/>

---

アイドル探偵 7 「寿々菜と七不思議」編

2011年3月17日14時53分発行